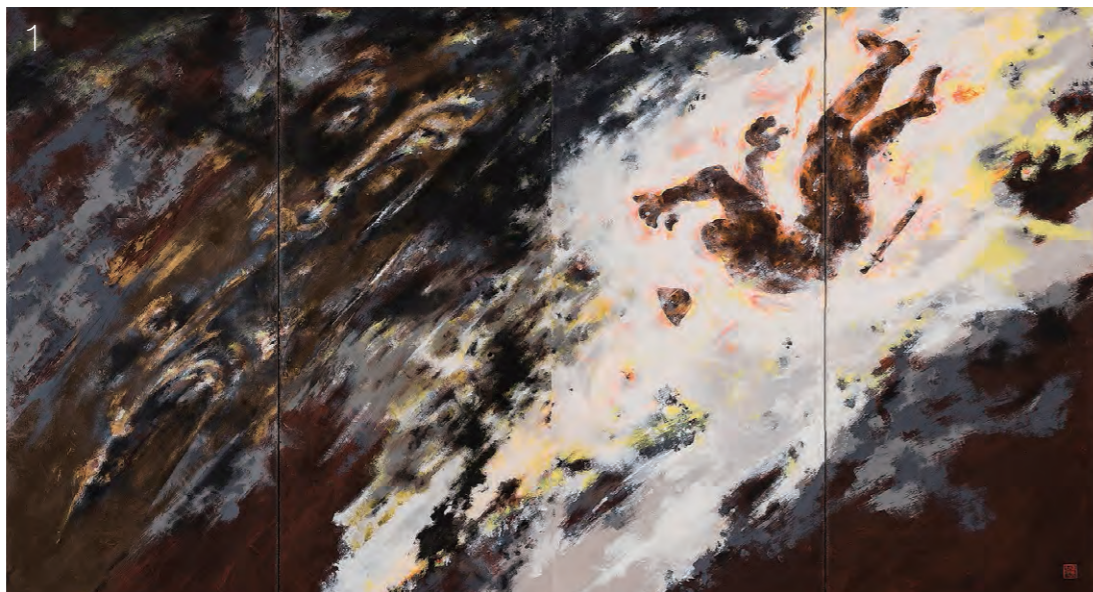




1. 四曲屏風「被爆した私」 2. 2回目の召集を受けた頃の三橋氏 3. 鍛造作品「戦痕」 4. 町田市役所前に作られた優しいフォルムの「ファイブストーンズ」 5. 二曲屏風「飢餓兵士像」



三橋國民(みつはしくにたみ) 日展参与・光風会名誉会員・町田市文化協会芸術顧問。内閣総理大臣賞・辻永賞ほか受賞多数。原町田3丁目の勝楽寺鎮魂祈念館で常設展あり

戦後70年目の夏に――。 造形美術家 三橋國民

太平洋戦争下で最も凄惨と言われた西部ニューギニア戦を戦い、奇跡の生還を果たした三橋國民氏。僚友たちへの鎮魂をテーマとした芸術活動と平和の普及活動が評価され、2014年春に町田市名誉市民、10月には東京都名誉都民として顕彰された。

あの日から
70回目の夏が来た。

特集◎

町田の夏3



1945年8月15日、太平洋戦争で日本は降伏した。三橋氏がこの知らせを聞いたのは3日後の8月18日のことだった。西部ニューギニア（現インドネシア共和国）の小さな島の山奥で無縁を傍受し、耳に飛び込んできた敗戦の知らせは、勝利を信じて戦ってきた自身への憤りとも、安堵の気持ちとも言えない複雑な想いとなって彼を襲った。三橋氏が所属した部隊40人のうち、2人を残して全員が既に息絶えていた。ニューギニアに向かう途中の重巡洋艦「青葉」で、荷物の積み込み作業中に深い海溝に真っ逆さまに落ちていった者、敵機の銃弾を浴びて身体の半分を吹き飛ばされた者、マラリアに侵されて命を落とした者、そして自決した者。皆、彼と年端の変わらない将来ある青年たちばかりだった。死と隣り合わせになりながらも三橋氏は懸命に戦い続け、その一方で友の亡骸を葬る役目も果たしていた。

最後の戦闘地「ドゥモ島」は、幅300m、長さ800mのニューギニアソロン湾内に浮かぶ小さな島だったが、米軍機の猛爆撃で島の原型までも変わっていた。

重症を負った三橋氏がここから救出され、5000kmもの道のりを越えて原町田にある自宅に辿り着いたのは終戦から10か月後の昭和21年6月27日だった。

あの時死に別れた何十人もの仲間の命を譲り受けたかのように命を繋ぎ、彼らへの想いと創作活動の炎が消えることはない。あの戦争で体験した凄惨な出来事は今でも鮮明に脳裏に焼き付き、彼の気魂を突き動かす。

戦争の愚かさや平和の尊さを伝えようと、小学生から大学生に向けた講演も全国各地で行った。過酷な体験を綴った著書は大反響を呼び、遺族が原町田まで訪ねてきたこともあった。

あれから70年。「鎮魂」をライフワークにした三橋氏の想いはこの先も永遠に続いて行く。

作品展
「鎮魂70年目の夏」
場所 町田市立博物館
期間 8月30日(日)
月曜休館 入場無料